

新刊紹介

◆『鶴見町の植物』

真柴茂彦著

(発行・鶴見町教育委員会)

平成十三年二月二十二日刊 A5判 一八一頁

鶴見町教

育委員会は

鶴見半島(町

内)に生育す

る代表的植

物をカラー

写真(四二六

枚)で、四百

五十種を紹

介した小冊子を発刊。本書の著者は、同町教育委員会公

民館指導員(日本生態学会会員・県文化財保護指導員)

で、カマエカズラの発見者として知られる。

本書の構成は自然散策(五一頁)と鶴見町の植物(一〇

七頁)を中心に編集されている。

日蓮宗経国堂公論 九州書籍



鶴見町教育委員会

自然散策では、五四項目に分けて町内各地の動植物を中心に紹介している。いま、各項目の一部を紹介すると次のとおりである。町内の自然と戦跡の鶴御崎・県内では大島だけ分布のノアサガオ・外国産が幅を利かせるタンポポ・アシタバとよく似たハマウド・古くから町内の浜にあつたハマオモト・半島に咲き香るノジギク・鶴見半島北限のソナレノギク・海辺の景観を特徴づけるダンチク・葉草を談義・大島にもあつたハマホラシノブ・南からきたウバメガシの林・アコウの大樹のつくる森・クロマツの林が海岸から消えた・桑野浦のアコウの並木・田や湿地と共に消える植物・逃げ出した花、土手の花・正月祝いと植物・自然研修路―猿戸鶴御崎・子どもたちよ自然の中へ(ツルミマリンクラブ)・モチノ木とメジロ・町内の鳥と鷺山・温暖化と鶴御崎・猪と鹿と鶴見半島・鶴御崎でヒメボタルの乱舞・半島いつばいのウスバキトンボ・鯨の記録・マリンパレスに行つたユキフリソデウオ・巨大なイセエビの仲間ニシキエビ・貝という名のタコ・失われる藻場・町内の巨木調査・鶴見の自然散策を終える(二兵士の思い出)等等。

本書の自然散策を読むと、鶴見町へ自然と歴史の旅を

したくなるから不思議である。また、各項目について分
かりやすい、親しみのある文章で綴られており、著者の
自然への熱い想いが伝わってくる。

鶴見町の植物の紹介では、一頁に三枚ないし二枚の植
物のカラー写真を載せており、各種の植物ごとに学名・
環境・花季・形態・生態の状況を端的に記述している。
たとえば、カワラヨモギの場合、環境―河原、海岸の砂
地、日当たり良い崖。花季―九月―十月(秋)。形態―葉
は全裂して細く切れ込む。生態―多年草、乾燥に強い、
鶴御崎に多い、というように説明がある。また、植物の
カラー写真は見る人に自然のよごれない美しさ、神秘
さなどが感じられる。

本書の巻末には九頁にわたって、鶴見町の植物の索引
があり便利。

著者はあとがきで、発刊の目的や抱負を次のように述
べている。

(前略)地球の温暖化や生物の絶滅種が話題になるこ
のころ、私たちが生活している鶴見町の自然に関心
を持ち、心にゆとりを持って付近に目をやるとき、
小冊子が役立つよう路傍や山道にあるような種類を

多く取り入れた。

町内の人々に「こんなに身近に色んな花があつた
のか」と興味を持っていただければと考える。また
自然の大切さを学ぶ学校の子どもたちの手助けがで
きれば、望外の喜びである(以下省略)。

本書の発刊の記は鶴見町教育長安達一明、口絵はカ
ラー写真で町の文化財や各地のすばらしい景観を紹介、
観光地図も転載している。また、本書は著者が町報で
「自然散策記」を五十三回にわたって連載したものを主
な内容としている。この小冊子は鶴見町へお出かけのと
きの必携書。頒価千円。問い合わせは鶴見町教育委員会
(0972・33・1000)、または真柴茂彦氏(097
2・22・1736)へ。(矢野)

◆『第四十九年刊歌集 宗太郎』

佐伯合同短歌会編

平成十二年一月刊 B6判 二四九頁

本書は佐伯合同短歌会が第四十九集目の年刊合同歌集
で、年に一回、会員以外の作品も収めた合同歌集であ
る。

一般二四二

人、弥生町

の昭和中学

校生徒と本

匠村の本匠

東中学校生

徒の約二四

〇〇首を収

録している。

歌集名は宗太郎。

佐伯合同短歌会の歴史は古く、『佐伯市史』によれば、

佐伯地方、戦後の短歌活動は、昭和二十一年（一九四

六）、汐月健介・小出正信らを中心にする佐伯文化会短

歌部として始まり、同二十四年十一月、佐伯合同短歌会

に引継いだ。佐伯合同短歌会は長門莫ら佐伯在住の歌人

が中心となり、宮道和夫が肝煎役として奔走、アララ

ギ・地上・日本歌人・槻の木・山柿・朱竹・歌帖・八雲

各派合同の短歌会という形式で発足した。

佐伯合同短歌会は、昭和二十六年に第一回歌集「権の

実」を発刊し、平成十一年（一九九九）の「宗太郎」まで



四十九冊を刊行してきた伝統のある芸術文化団体であ

る。序文「宗太郎峠今昔」は矢野彌生が峠の歴史を紹介

介。装丁は県美術協会員で水彩画、版画で活躍中の工藤

弘皓士氏、題字は創元会会員の深田松琴氏。編集委員長

大倉秀己氏、発行人鶴本幸子氏。会員頒価三〇〇〇円。

（矢野）

◆『佐伯地方碑文の解説』（全現代語訳付）

木許 博著

平成十一年十二月三十日刊 B5判 一六二頁

本書は元高校校長、専門学校講師で佐伯史談会・佐伯

独歩会員であ

る著者が、十

年かけて佐伯

地方の碑文を

解説して本に

まとめた労作。

碑文は佐伯市

のほか、弥生

町・直川村・



野津町・鹿児島県霧島栗野町のもので、全部で二三。そのほかに碑文ではないが、「お為半蔵心中口説序文」も載せている。

本書の特色は、碑文の原文、書き下し文、語注のほかに、口語体の現代語訳をつけていることである(県内では口語体の現代語訳等は初めてとみられている)。また、写真も豊富に入れ、親しみやすい。

新聞報道では、本書について次のようにコメントしている。

(前略)碑文の解読は、友人の依頼で野津町内の碑文を調べたことがきっかけ。野津町の碑文を調べるうちに、自身が生まれた地域(木立地区)の碑文にも興味を持つようになり、佐伯市内の碑文も調べるようになったという。これまで解読した碑文のうち、特に印象に残っているのは野津町西畑の「虹澗橋記」。虹澗橋は一八二四(文政七)年に完成し、「当時は日本最大規模で、美しい橋だった」と橋にほれ込んでいた。一九九九年十月、国指定重要文化財になった。解読しにくいことで知られている碑文だが、木許さんは「最初に受け取った碑文集では解読でき

ず、現場に行つて文字を一つ一つ拾い上げた。十回以上、足を運び、石碑とにらめっこをしました」。十年かけてほぼ全文を解読したものの納めはしていない。「五百八十一文字のうち、「黄一中」の三文字が分からない。中国の人名のようだが、国会図書館に問い合わせても分からなかった。中国に行つて調べるまで死ねない」と話している。木許さんは「解読は地味な作業だが、先祖たちの哀歓、暮らしの様子を読み取れたときの喜びは言葉にできない。子どもたちに祖先の祈りや人格の尊さなどを伝えていきたいと話している(『大分合同新聞』平成十二年一月十三日版)。

本書は郷土史研究を志す人には必携の文献。序文は佐伯地区文化財連絡協議会会長の古藤田太氏、拓本は佐伯史談会員の宮下良明氏採扱のものを利用。口絵はカラー写真(毛利家菩提寺養賢寺・城山三の丸櫓門・番匠川と城山)二頁。(矢野)

『村の地蔵・庚申さん』

米水津村教育委員会

平成十二年三月刊 B5版 一七頁

本書は米水津村の文化財調査委員の方々が、暑い日も寒い日も調査を続けた結果まとめた労作。

本書の構

成は1部

「村の地蔵さ

ん」、2部

「村の庚申さ

ん」に分か

れ、村の地

蔵菩薩は写

真をそえて六二基（宮野浦一一基・色利浦一七基・浦代

浦一八基・竹野浦六基・小浦六基・間越四基）が紹介さ

れている。いずれも所在地・名称・大きさ・お姿・設置

年・管理の状況が記されており、必要に応じて「その

他」の項で、その地蔵菩薩の造立の動機や浦々の人々と

のかかわりなどが語られて興味深い。

また、村の庚申塔については、三六基（宮野浦四基・

村の地蔵 庚申さん

米水津村教育委員会

大内浦二基・色利浦七基・浦代浦一三基・竹野浦五基・小浦三基・間越二基）が写真をそえて、紹介されており、その所在地・名称・大きさ・お姿・設置年・管理の状況が記されている。さらに、各庚申塔には文化財調査委員によつて、詳細な実測図が付記されており、調査のご苦労、その熱意が感じられる。

本書を読むと、浦々に多くの地蔵菩薩や庚申塔が残っていること、また、昔から浦々の人々によつて厚く信仰されていたことが分かる。また、現在でも地区の人々によつて大切に祀られているものが多いが、中にはお参りする人々もないものもあるという。

巻末には米水津村の地蔵尊・庚申塔の分布図を掲載しており便利。本書作成のため、調査編集に参加した方々は、文化財調査委員の高宮昭夫・御手洗進・木村勘一・富松俊夫・浜田平士、前文化財調査委員の山田増人・鎌矢久喜、教育委員会課長補佐の遠山典正、前課長補佐小田昭夫、社会教育指導員の末永富也の各氏である。発刊のあいさつは橋本和雄教育長である。本書は民俗学に関心をもつ同好者に一読をおすすめしたい。（矢野）